

禁煙外来スキルアップ講座in浜松

「喫煙率低減」を実現する 137の映像と熱意

加藤一晴

浜名医師会・理事



禁煙治療の変遷

2006年にニコチン依存症管理料が算定され、わが国の禁煙外来は1万件を超えている。治療の主体は、ニコチン置換療法から一部を除き内

禁煙に関する治療薬有害事象などの諸問題表面化で、医療サイドの意欲も低下。喫煙者側の「どうせ止められない」という思い込みなど、曖昧あいまいなスタンスでは、2022年までの喫煙率目標（12%）を達成できるわけがない。今、禁煙外来のスキルアップが求められる。

服薬に移動しているが、禁煙外来の施設基準は厳しいので、導入に踏み切れない施設も多い。

3年前に民主党に政権が変わり、タバコ価格が上昇したが、その時、禁煙外来に希望者が殺到し、禁煙補

助薬が底をついたことは記憶に新しい。

価格が上がれば禁煙に挑戦する人は増え、未成年喫煙は激減するが、内服薬の有害事象（自動車事故などの増加）がマスコミで囁ささやかれると、

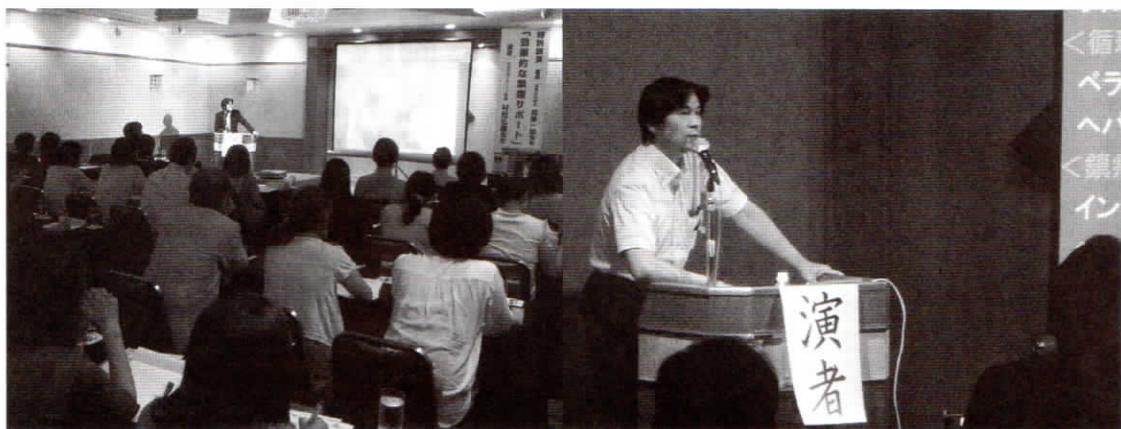
二の足を踏む施設も出てきた。

そんな中、平成24年度に自民党政権に戻ると、真っ先に決定したのはタバコ価格の据え置きだった。その煽り(おほ)を食った禁煙外来は、ほぼ閑古鳥状態である。政権によってタバコの有害性が変わる訳ではないし、政治家や官僚は貴重な納税者を演じさせられる元気な喫煙者しか知らない。

一方、禁煙できなくて、あるいは病気のために朽ち果てて行く姿を見るのは、我々医療従事者なのだ。ここで今一度、禁煙治療の重要性についての啓発はできないものかと思案していた。

禁煙外来の目論見

禁煙外来開設には種々の要件があるが、正面切って対峙(たいじ)するスタンスがあれば、さして困難ではない。それでも、治療薬有害事象などの諸問題が表面化すると、医療サイドの意欲も低下する。患者側の「どうせ止められないだろう……」との懸念に対し、治療側も内心「そうかも知れ



「効果的な禁煙サポート」について熱弁を振るう講師の村松弘康先生(写真右)と、熱心に聴く来場者(写真左)。

ない……、止めとこうか」と及び腰になる。このような曖昧(あまいま)なスタンスでは、2022年までの喫煙率目標(12%)など達成できるわけがない。

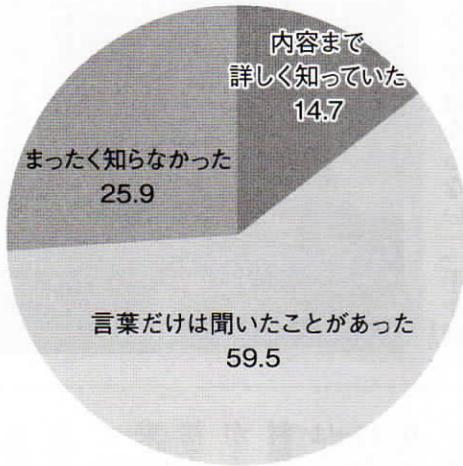
一方、海外では様々な手法を凝らして、無煙社会を目指す取り組みがなされている。日本は何とか追従しているが、種々の情報操作により阻まれて来た。しかし、幸いなことにわが国には、健康保険で禁煙治療ができるツールがある。企業も喫煙率の高い30〜50歳代男性の扱いに頭を悩ませている。低迷している禁煙外来担当医や、突破口の見えない企業産業医に対するスキルアップを思いついたのは、当然の帰結であった。

講師選定

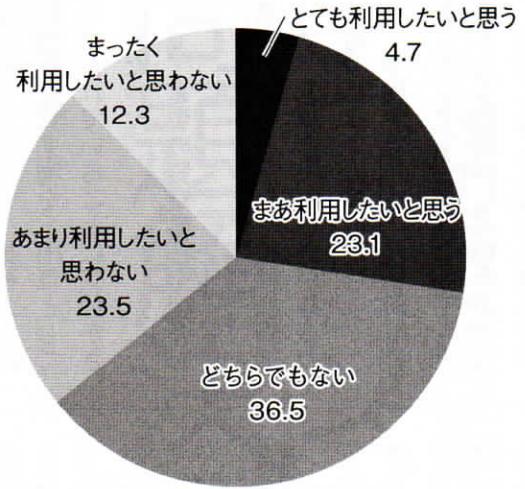
講師として真っ先に浮かんだのは、呼吸器専門医の村松弘康先生(東京日本橋・中央内科クリニック院長)であった。

村松先生は30代発症の肺がん患者さんを大勢診てきた。ある日突然、健診で肺がんが発見され、「タバコ

禁煙外来で医師から禁煙指導を受けられることを知っていましたか。



今後、禁煙外来を利用して禁煙したいと思いますか。



資料:WEB「Yahoo!ヘルスケア たばこをやめよう」より

2022年迄に喫煙率12.2%を閣議決定!

さえ止めていれば……」と悲壮感溢れる姿が眼に焼き付き、それでタバコ問題に関心を寄せるようになり、これまでに1000例以上の禁煙治療歴がある。そして、行動力・情報発信の確さでは、わが国でも有数の人材である。データ羅列だけの学者然スタンスではなく、社会派ドクターの面も併せ持つのが村松先生である。

小生（加藤）の呼びかけに対し村松先生は、「お伺いします」と快諾してくださった。後は会場確保と参加者の選定であ

る。静岡県西部地区で目ぼしい医療機関をリストアップして、ローラー作戦を展開したが、更なる効率アップのために、企業産業医や保健師にも対象を拡げた。

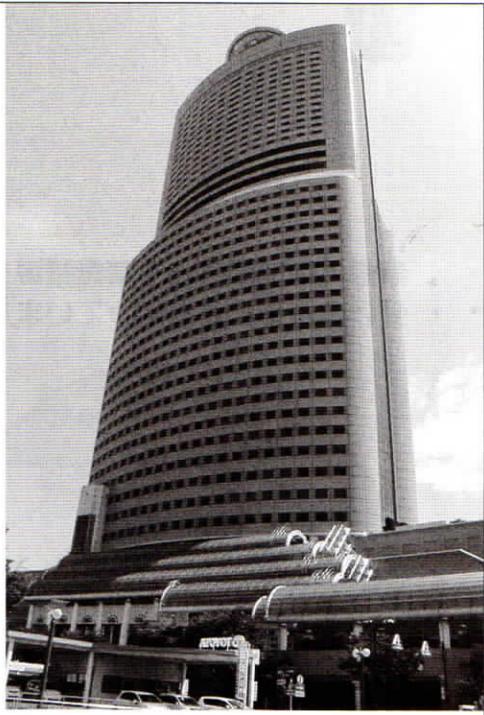
講演内容

スキルアップ講座の代表世話人は坂尾正先生にお願いした。浜北医師会長である坂尾先生は、数年前に浜北医師会禁煙宣言を行なった。

講座では、坂尾先生挨拶の後、小生が座長を務めた。村松先生は、前半60分（スライド90枚）、後半30分（40枚）動画映像7つを駆使し熱弁を振るった。スクリーンに映し出される画像に、聴衆は釘付けになった。

特に、わが国と他の国々における対策の違いは、強烈なインパクトを与え、軽快なペースで新鮮な情報が入ってくる様子は、大いなる衝撃だったに違いない。怒涛の如く、速射砲のような現実・真実・事実は、聴衆の概念さえも変えてしまった。

「ここまでタバコは悪いのか?」何



講演会に溢れた熱気
で会場が熱気に溢れた
満員で熱気に溢れた
演会と懇親会の会場
となったアクトタワー。

とかしなくてはならない」「手を拱こまほいていてはいけない」と、各々がきつと心に期しただろう。担税力の高い合法的依存性薬物を、国策として推進させられていることに気付かされる内容だった。

ここで、2つの質疑応答を紹介したい。

来場者―「自動車運転や機械操作従事者には、意識消失の懸念があるの
で、処方できないのでは?」。

村松―「車社会であり、当然利用者も多いが、これまで経験した1000名では経験していない。ただし、注意しなくてはならないのは

併用薬だ。併用する薬如何では、起き得るかも知れない……。2週間服用して何も無ければ大丈夫と判断している」。

来場者―「内服薬の添付文書には当初7日間は喫煙できると書いてあるが?」

村松―「長らく吸っていたのを急に止められない。しかし、そのうちに不味くなって、吸う理由がなくなり、タバコから手が離れる……」。

予定された時間を3分ほどオーバーし、会場は熱気に包まれた。一般的なタバコ関連の講演は、低調に終わるのが普通である。通常の講演会では、休憩時間に中座する参加者もいるものだが、この度の禁煙外来スキルアップ講座では皆無だった。

懇親会

その熱気は、最上階レストラン(アクトタワー45階)での懇親会まで続いた。当然、禁煙外来担当医もいたが、産業医の姿もあった。大手企業には30〜50歳代男性の喫煙者が、ほ

ぼ手付かずで残っている。産業医同士あるいは保健師同士も同じテーマで語り合っていた。企業としても労働環境改善、生産性向上のための喫煙率低減は至上命令である。

これまで医務室では、禁煙外来開設はできなかったが、これで希望者に(自信をもって)禁煙外来を紹介できるに違いない。講師の村松先生は帰京のため中座したが、講座の余韻はしばらく消えることはなかった。

参加者は相当勇気付けられたに違いない。わが国も真剣に喫煙率低減を目指すのなら、実地医家や産業医を招いた今回のようなスキルアップ講座をすべきだろう。この取り組みは、全国展開するだけの十分な内容を有しているが、これは企画する側に、意欲と胆力があれば可能なのだ。

スキルアップ講座開催に御尽力いただいた代表世話人の坂尾先生、サポートして下さったファイザー浜松オフィス、そして遙々浜松まで来ていただいた講師の村松先生に感謝いたします。

〔謝辞〕